

Ⅲ 時間割の科学

—— 中等教育における教育課程と教師・生徒との接点の研究 (2) ——

酒井為久 中野満男 阿部健一

Ⅰ まえがき

前年度の前稿において、この研究テーマに沿った実践研究から、いくつかの課題を明確にしたことを報告しておいた。本年度の研究は、それらの課題を発展的に考察することであるはずだが、本校の研究協議会における発表が当面の目標となり、予定からは相当にはずれた方向へ進んでいった。以下、その発表を、ほぼそのまま再録する形でまとめてみたい。発表のまとめ、並びに発表者は、酒井為久である。

Ⅱ 教育課程と教師・生徒の接点の問題

発表題の教育課程と教師・生徒の接点というものは、具体物としましては、時間割を想定していただきたいと思います。時間割を取り上げましたのは、教育課程が日に日に学校において実施されている状況を、最も集約した形でとらえるのが、時間割ならびに時間割を中心とした時間割系の任務であるからでして、こうした学校の日常生活的な面から教育課程の問題を見てまとめていくことは、あまりなされていないようなので、私ども、昨年度と本年度、本校の場合を事例として意欲的に取り組んだ次第であります。

その結果を感想として申し上げますと、学校教育の本質に触れる問題が多く、なかなかむずかしい問題に取り組んだことになったといえます。教育課程そのものにつきましても、むしろ受け身の受け取り方で、すでに編制されている教育課程をどう実際の場で展開しているか、またいくべきかというのが、主たる内容となっていったのであります。

そこで、いえますことは、先の発表でも触れていましたように、生徒の能力に応じて教育課程が多様化し、その内容が現代化してきている一方で、中等教育の規模が拡大し、高校も準義務教育化している現状において、教育課程を学校教育の場で展開する際に、以前とは異なる多くの困難といえますか、新しい問題を自然にかかえることになり、それらの焦点ともいえる時間割のもつ役割りがより重要視されるようになってきているといえると思うのであります。

そうして、十数年来、慣例としてなされていること

を、再検討しなければならない場合が多くなるように見受けられましたが、そういうことを、そのまますぐに教育課程の方に反映させるという方向で考えるわけではなく、教育課程を実施していく際に生じてくる諸問題を、まず取り上げてみようとしたのでありまして、中等教育の内容や方法が現代化し、専門化、細分化の傾向が見受けられる現在、教師の教えがいや、生徒の勉強しがいを増すにはどうしたらよいかという観点、その際、教師の側を重視した問題のとらえ方と生徒の側を重視して考える問題のとらえ方とは、しばしば対立することもあるのでありますが、そういう観点から再検討すべき問題が多く見受けられたのであります。本校の場合を一事例としまして、そういう問題を洗い出し、拾い上げている間に、教育課程が実際に行なわれている状況の実践研究から、いくつかの普遍的、一般的な問題点も明らかにできたと考えています。

さて、具体的な話にはなりますと、資料に1～8として掲げたような項目について実践研究をしたのであります。

1. 時間割表示方法の検討——44年4月

として掲げた項目は、手始めに時間割の表示方法を検討し、新しい表示黒板を目につきやすい所に設置したのであります。全学級、全教官、特別教室使用の時間割を表示できるようにしたのが目新しい点であったわけですが、時間割は学校構成員の頭や腹に入ってしまうようなのが理想であって、皆の注意を常に引く必要はあまりなく、常に注意を引くような形であるのは、何かの問題があると考えてよいといえることができます。それが、編制され実施されている教育課程に関係あるかどうかの吟味は欠くことができないと思いますが、直接の原因としては教師の側の問題(出張・欠勤等)が多いようで、時間割の変更の問題と関係が深いのであります。

ところで、時間割を直接扱う系の任務についての問題ですが、

2. テストの時間割で時間割の編成と作成の問題を考察したこと——44年5月から

という項目でまとめましたように、その係がどの程度の主体性をもっているかということが問題となります。テストの時間割は短い期間の特殊な時間割なの

で、それを利用して時間割系の任務を単なる調整役か、理想に近い姿を実現していけるものか等々、実際にテストの時間割を組みながら考えましたが、結論的にいえることは、学校の姿勢やあり方がそのまま反映することであり、学校としての姿勢次第だという以外にないように思われました。いずれにせよ、時間割系の任務はより重要視されねばならない方向にあるということは間違いのないところであります。

考えを発展させるならば、教育課程の問題もまた、学校のあり方、特色につながっているというわけですし、そういったところのかかわりを明らかにすることが、教育課程の大きな問題になっていくと思われま

す。

次に、資料のプリントの項目の 3. 本校における時間割編成上の問題点を洗い出し まとめたこと——44年11月

ですが、そこでは本校独自の問題を主に取り上げたのでありますが、そうする必要があったということは、時間割を構成する諸条件や諸要素の変動があったということです。資料の中に、その一部分を載せておきましたが、学校教育の問題で、その本質に触れるようなむづかしい問題を、時間割の編成という日常的な次元で、具体的な作業を通して話し合うこともできるわけでありまして、そういう思考方法が、例えば意見の対立などがある場合、大変貴重になるのではないかと考えさせられることもあります。一方では、それは便法の域を出ないということもできるように思われるかも知れません。

4. 時間割と学習意欲との関係についての調査

——44年11月

この項目では、生徒の学習意欲と時間割との関係を、本校の中学6学級高校9学級の全校生徒を対象に調査することによって、明らかにしてみました。調査結果の中で参考になる部分を、資料として図表で示しておきました。ほぼ、平生、経験的に予測していたのと同様の結果が出ているようであります。調査結果を見まして、いいたいことは、中学生の方が時間割によって学習意欲を左右される率が大きそうであり、高校生の方は時間割を自分で消化していく面がありそうということでもあります。中学と高校における時間割の学習意欲を左右する程度の差、いわば、教育課程の生徒に対する支配力は中学の低い学年ほど大きいのではなからうかと思うのであります。

それを思いますと、学習の基礎を固める時期である中学の教育課程を、大いに問題にすべきだと思いますが、実際にはさして問題にされていません。むしろ、教育内容とそれに見合う生徒の能力との差が目立ってくる高校において、教育課程が問題として取り上げられる場合が多いということは、現実に対処する上でや

むをえぬところだとは思いますが、中学の段階から教育課程をもっと問題にしていくなさないと、問題点の一つと考えているのであります。

5. 本校紀要第15集に「時間割の科学——中等教育 における教育課程と教師・生徒との接点の研究 (1) を発表——45年3月

この項目は、このあたりまでの教育課程に関する実践研究を、時間割を中心にして、中間報告的にまとめたものであります。

項目の6は、次のものであります。

6. 時間割編成に関する原則（内規）の決定

——45年3月

これは、本校のこれまでの時間割編成上の諸慣行の成文化に過ぎませんが、成文化するということの持つ意味、即ち、その間にいくぶんの取捨選択を行ない、いくらかの規範性を持たせることにより、時間割を構成する諸条件や諸要素が変化しつつある現状に、対処できるのではないだろうかというのであります。具体的に申し上げることはできませんが、内規を決定することにより、時間割の面で、本校の教育課程がより充分に実施できるように、また、生徒の学習が一段と向上するように考えたのであります。先に述べましたところの、時間割の編成という次元で、困難な問題を考え解決してみるということに、結果として当てはまっているといえるかもしれません。

次に、項目の7であります。

7. 44年度時間割変更業務の集計——45年9月

資料の中に、集計を載せてありますが、44年度中に時間割を変更した日数とその原因を調査集計してみました。本校では空き時間ができた場合、原則として補充していますが、そうした際の変更が比較的多く、その原因の主なもの、教師の側の出張や欠勤が第一に上げられます。次が学校行事等となっています。こうした調査集計はあまりなされませんが、これを一軒の家の家計簿にたとえればよいかと思います。日に日に実施されている教育課程にとって、何が問題点であるかまたその所在が明確になるという効能があるわけあります。

時間割の変更には無理が伴ない、教育課程を理想的に実現していくためには、かえってマイナスとなります。そういうところから、教育課程を理想的に実施していくための配慮として何が必要であるか、おのずから明らかになるところがあります。

次いで、8の項目であります。

8. 時間割を教官会議へ提出審議するようになった こと——45年10月から

時間割を、以上のように取り扱うようになってまいりました。教育課程と教師・生徒の接点であります時間割を正當に位置づけたことであると思いますが、そう

する必要がでてきたということ、学校としての考え方がようになってきたことの結果でもあるわけです。

以上のような経過と内容を通して、教育課程を中心とした実践を通じた研究をしてきましたことから、教育課程が日常の学校生活の中に占める位置とその比重とを、時間割に集約した形で明確にすることができたと思うのであります。

そこで、それらの実践内容について、やや分析的に共通する事項を整理してみまして、最後のまとめと致したいのであります。資料の終わりのところに書いておきましたのがそれでありましたが、

1. 教育課程の編制

教師の勤務に関すること

生徒の学習効率の問題

としましたのは、時間割を構成する三つの要素として、そのそれぞれについて深く検討する必要があります。

2. 空間的な条件

時間的な条件

としましたのは、時間割を構成する二つの条件として、それらの条件内でそれらの条件を有効に活用するような配慮が望まれます。

3. 時間割の編成の問題

時間割の変更の問題

としましたのは、時間割に関する技術的な側面でありまして、それを円滑に作用させていくところに、以上の1, 2, 3のものの上に、学校教育の日常的なあり方が集約されて、最もよく示されていくということができると思うのであります。

その個々の点について、一つずつ具体的に内容や問題を説明することも考えましたが、教育課程の諸問題という分科会のテーマから離れていくおそれもありますので、今は、教育課程に関連の深い時間割を媒介とした実践研究をしてきたこと、そして、そこから、それぞれの問題を明確にし、また、整理することができたということをお報告するだけにとどめたいと思います。

なお、教育課程は時間割化されて、始めて学校教育の場に定着するということを申し上げたいと思います。生き身の教師・生徒やそれらを取り巻く諸条件の中で、教育課程がその機能を発揮し始めるのは、時間割化されて以後であるわけですが、教育の現場にとって最も重要な、このところを抜きにして、教育課程が研究論議されることが多いようなので、(教育課程そのものは本来そうしたもので、高い次元で論じられるべきものではありませんが) そういう行き方でない、実践を基調とした教育課程の研究はできないだろうかと、ねらいの一つとしてこの研究に取り組んでみたわけでありまして、が、そうすることによって

出てきた問題は、学校教育の広い範囲にわたり、それぞれが関連を持っておりまして、教育課程独自の問題、教育課程に比重のある問題として出てきますのは、予想通り、教育課程の編制という問題であることを再認識したことをお知らせして、発表を終えることに致したいと思います。

Ⅲ 資 料

昭和44・45(前半)年度の実践研究記録

1. 時間割表示方法の検討——44年4月

緑色スチール黒板(120×120cm)に高さ80cmの可動式脚付き表示板に粉末磁石を組み込んだ紅白のコマを使用して表示するようにした。この機械化は可能であろうか。

2. テストの時間割で時間割の編成と作成の問題を考察したこと——44年5月から

テストごとに時間割を組み直す。最良と思われる時間割を組み年間はそれで通す。一定の法則に従ってテストごとに入れ替えるという三方式の間において、時間割係の機能を明確にすることができた。

3. 本校における時間割編成上の問題点を洗い出しまとめたこと——44年11月

(1)基本の考え (2)本年度の時間割編成方針 (3)従来通りの編成方針と変化してきた諸条件 (4)そう考える根拠(変化している条件) (5)その他の問題点 (6)教育課程との関係、以上の項目を内容としている。うち(6)の項目は次のような内容である。

どのような教育課程であっても、時間割は作成できるし、また作成しなければならないと思う。作成された時間割が、教師の教えがいや生徒の学びがいを増すかどうかは大いに問題にされなくてはならないと思う。教育課程が理想的であっても、その時間割化されたものが、教師の教えがいは増すが生徒の学びがいをさく場合やその逆の場合など、いろいろの場合を想定することができる。この面からも、教育課程の編制について参与できるものがあるのではないかと思われる。

4. 時間割と学習意欲との関係についての調査——44年11月

中学6学級・高校9学級の全生徒を対象として時間割と生徒の学習意欲との関係について調べる目的で調査を実施した。その結果のうち参考になる部分を別紙に図表として示した。

5. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第15集に「時間割の科学—中等教育における教育課程と教師・生徒との接点の研究(1)」を発表——45年3月

本校の時間割を事例として、その実態から課題を採

るねらいで、種々の問題点を明確にしようと試みた。新しい分野でもあり、充分な研究を今後進めなければならない。

6. 時間割編成に関する原則（内規）の決定
——45年3月

44年度の時間割係の任務の反省を土台にして、時間割を取り巻く諸条件の変化を考慮し、従来からの諸慣行を取捨して上記の内規を成文化決定した。8項目からなり、45年4月1日から適用。第1項は発表要旨に載せたが、附属学校の特色の一つとして教官は週一日の研究日（月・木以外の日）を持つこと等も成文化した。

7. 44年度時間割変更業務の集計——45年9月

別紙に結果を記したように、44年度の時間割変更状況を集計してみた。こうしたことはあまりなされないが、そこから問題点が発見できるのではないかと思ひ実施してみた。

8. 時間割を教官会議へ提出審議するようになったこと——45年10月から

45年度2学期中間テストから、時間割を教官会議へ提出審議することになった。時間割の学校教育に占める重要な比重を考えると、当然かつ最適な方途と思われる。

要旨にかえて

以上のようにして、教育課程が日に日に実施されている実態を確かめて、そこに見られる問題を明らかにしてみた。なかには、本校独自の問題も多いわけだが、普遍的総括的な問題として、学習指導の内容や方法の現代化が進み専門化や細分化の傾向が見受けられる現在、より以上の教えがいや勉強しがいを生み出すにはどうしたらよいかという観点から、時間割管理の問題はますます重要なものとなりつつある状況を指摘することができる。しかし、そうしたことがすぐそのまま教育課程にはね返っていくものではないということも明白なことであり、教育課程そのものはより高次の時点において論じなければならない面が多い。

生き身の教師・生徒と教育課程との接点を中心とした問題点として、次の諸点をあげることができた。

(1) 教育課程の編制

教師の勤務に関すること

生徒の学習効率の問題

(2) 空間的な条件

時間的な条件

(3) 時間割の編成の問題

時間割の変更の問題

以上、学校教育の本質に触れる問題が集約されている感があり、そうした問題点の所在を整理できたことを報告するにとどめる。

次頁の図と表について

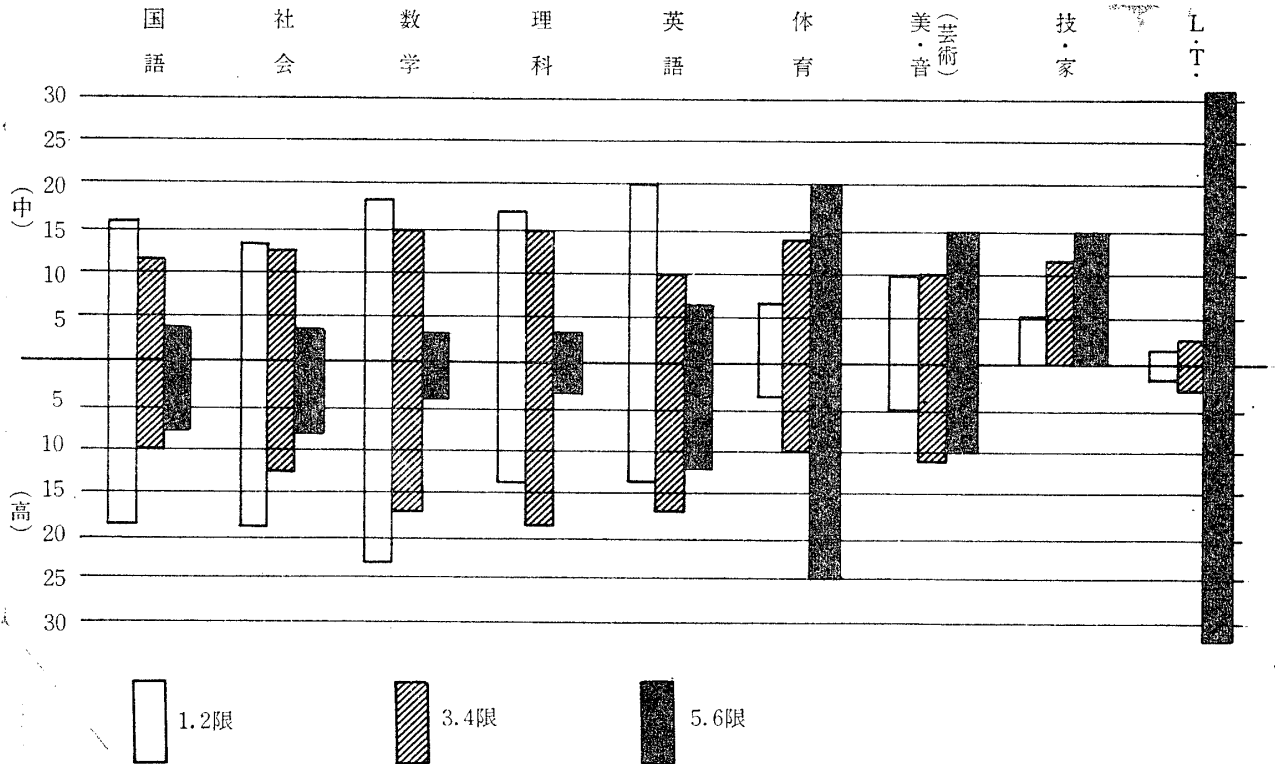
「学習意欲との関係についての調査結果」の調査についての詳細は、本校紀要第15集にその要点を記載してあるので参照願いたいと思います。図は、本校全生徒の学習希望時間帯をパーセントで示したもので、実践記録の項目4に基づいています。

「昭和44年度時間割変更の日数と原因の集計」は原因を主とした集計ですから、同一日にいくつかの原因が重なった日があります。変更のなかった日が、約11%ほどです。授業の日の10日のうち9日まで変更があった勘定になります。実践記録の項目7に基づいています。

(酒井為久 記)

生徒の学習意欲との関係についての調査結果

教科別希望時間帯、パーセントのヒストグラム



昭和44年度時間割変更の日数と原因の集計

原因 \ 月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	計(日)
出張	6	5	4	2	5	3	6	1	1	3	2	38
欠勤	6	3	11	4	5	8	5	3	3	8	5	61
テスト	2	6	1	5	2	4	4	5	2	8	5	44
行事	2	5	1	5	3	2	2	3	1	5	1	30
調整	1	0	3	1	5	2	5	6	0	3	2	28
身体検査	8	6	7									21
個人の都合		2	1			2		2		1	1	9
調査				5				1				6
P.T.A関係	1	2	1						1			5
その他	2	7	2	3	7	4		2	4	1	6	38
計(日)	28	36	31	25	27	25	22	23	12	29	22	280
授業日数 (行事も含む)	19	24	25	16	23	25	24	17	19	23	17	232

行事の内容：球技大会，体育大会，文化祭，遠足

旅行，工場，裁判所見学，日展鑑賞

調整の内容：進度の調整（出張，欠勤の場合の調整も含む）

その他：教生関係，学校参観，仕事，他

入学式・始業式・終業式等は含まない。